

よそモンから 長崎へ ひとつこと

長崎大学 教授
(国際教育リエゾン機構
国際教育戦略推進部門長)

まつ しま だい すけ
松 島 大 輔

年 齢	42才
出 身 地	石川県金沢市
長崎着任年月	2015年10月
勤 務 地 履 歴	東京 →米国・ボストン →インド・ニューデリー →タイ・バンコク →長崎

着任前の長崎について

●着任される前に、長崎について持っていたイメージ、知っていたことなどを教えてください。

前職（経済産業省）の新任研修で20年前に初めて来崎（研修先は五島列島の旧有川町でした！）した際、長崎は良い意味で、地霊（ゲニウスロキ）が醸し出す強烈な「違和感」に襲われる土地だと感じました。職業柄、日本47都道府県はもちろん、世界も欧米からアジア、アフリカを含め70か国以上は訪問し、10年近く海外に住んでおりましたが、奇異に聞こえるかもしれませんが、この感覚に襲われたのは後にも先にも長崎と4年間駐在したインドだけです。

着任した頃の長崎について

●着任直後の長崎は、どのような印象でしたか。

これまでの引越しの中で、最もスムーズに生活が立ち上がった経験から、物質、精神両面で非常に生活の質という点で豊かな土地柄だと思います。不思議なほどストレスがかからないというか、美味しい海のタンパク源の恵みを頂戴し、お陰様で体重も10キロほど減量に成功できた次第です。何よりも、小さな子供を3人抱える我が家では、程よい都会と自然が並存し、歴史の記憶が堆積し、家族が素早く長崎に溶け込めたことは大変感謝しております。

現在について

●長崎についての印象は変わりましたか。変わったとしたらどのように変わりましたか。

両義的な感覚ですが、これだけの日本有数の観光地であり、自治体の観光アピールが秀逸にもかかわらず、良い意味で観光地化していないところが、大変印象的です。仕事で、日本各地の観光地をアジアに売り込む仕事をお手伝いしてきましたが、訪問するには良いが、住むのは御免こうむりたいという「俄か観光地」が多い中で、長崎はむしろ住めば住むほど味が出てくる日本でも有数の、稀有な土地柄だと確信するに至りました。

●長崎について、これは知らなかったといった発見はありましたか。

「長崎では白身の魚しか食べない」と教えて頂き、魚については北陸出身ということで、いささかの矜持がありましたが、住んでみて、そのプライドも一瞬で粉碎されました。長崎で生活するにつけ、魚種の豊富さに圧倒されております。毎日スーパーや魚屋に行くのが楽しみでなりません。また焼酎「壱岐」がGI（地理的表示）を取得した唯一の焼酎だと教えてもらい、海外出張の際は、親しい友人達に密かに売り込んでおります。

●「これはもっと全国に（あるいは世界に）自慢してよい」と思われるものを教えてください。

教壇に立っておりますと、学生さんの学びへの意欲は大変高いものがあります。その学びの志の高さと環境の良さは誇るべきでしょう。また和華蘭文化がその一つの通奏低音として流れているのかもしれませんが、先ほどの強烈な違和感、これを体験できる有数の場所として、長崎を世界に自慢して良いと思います。まさに、「分からないから愛される」、「ますます知りたくなる」、という境地が最大の自慢だと感じております。

●今の長崎に不足しているものは何だと思いますか。

「危機感」。このうち、人口動態などのピンチ、「危」の部分は皮膚感覚で理解している方が多いようですが、寧ろ不足しているのは、チャンス、「機」の部分。ピンチはチャンスです。長崎は質量ともに「不足しているものはない」という強気で攻めて欲しいです。

別件ですが、いわゆる専門の自転車屋が市内に少ないのではないかと。やはり坂

が多いので皆さん自転車は使わないのでしょうか？ 通勤用の自転車を買うのに難儀しました。

●今後10年、20年先の長崎の将来を見据えて、ぜひアドバイスをお願いします。

若い世代と接しておりますと、長崎の将来のため、ぜひ他と比べるような横並びの強迫観念を避けて欲しいものです。何度も繰り返しているように、強烈な違和感を体験できるのは、長崎だけであるという固有性。それは何世代にもわたって先達が積み上げてきた土地の記憶、地霊（ゲニウスロキ）に由来すると思います。思い切って、逆に宣伝しない、なかなか訪問できない観光地を目指す、というのはどうでしょうか？ 日本中の観光地を見てきましたが、おそらく、日本でこの戦略を採用できるのは、長崎以外にそれほどないと思います。難しいからこそどうしても行かざるをえなくなる土地。まさに「秘すれば花」。そのような場所として様々な可能性を秘めた世界的にも特別な土地だと確信しております。